

再発見された旧松方コレクションの レオナルド・ビストルフィ作彫刻作品群について

第一回調査報告

高橋明也

現在まで国立西洋美術館には、松方コレクションに由来する53点のロダン、6点のブールデルを中心とする彫刻コレクションが所蔵されている。よく知られているように、かつて松方コレクションに帰属していた作品は、1927年(昭和2年)前後の金融恐慌時を中心に、担保物件となり銀行に差し押さえられたり、競売に付されたりして散逸してしまったものが多数ある。国内外を問わず近年折りに触れて、それらの作品が再発見されるなど、美術品マーケットに再浮上する機会が多くなってきた。そうした作品のほとんどは絵画作品であるが、西洋美術の全貌を実際の作品によって我が国の人々に展覧する「共楽美術館」の構想を抱いていた松方幸次郎が、彫刻や素描、家具、工芸品など、多岐に渡るジャンルの作品を多数収集していたことは競売目録などから窺われ、事実、タピスリーなどのまとまった収集が国内に現存することも確認されている。

今回、関西に所在するX家収集中に旧松方コレクションに由来する彫刻作品(複数)の存在が明らかとなった。これは、一連の旧松方コレクションの再発見の中では、筆者の知る限り、近年最も大規模でセンセーショナルなものと言える。問題の作品群は、19世紀末から20世紀初頭にかけて北イタリアを中心に活動した彫刻家、レオナルド・ビストルフィ(Leonardo Bistolfi, Casale Monferrato 1859 - Torino 1933)の大理石と金属による彫刻・浮き彫り作品6点(断片17個に解体されている)である。以下はこれまでに分かった作者と作品概要に関する最初の報告である。

1. 経緯

2000年夏、大阪府所在の公立美術館の学芸員K氏を通じて旧松方コレクションに由来すると思われる彫刻作品調査の依頼があり、写真資料等が入手されたため、非公式に調査を進めた。その結果、資料に見られる作品が19世紀末のイタリアを代表する彫刻家のひとり、レオナルド・ビストルフィの作品であることが判明し、急遽、本館学芸課の高橋(近代絵画・彫刻担当)、河口(保存修復担当)、塚田(保存科学担当)の3名で11月に最初の現地調査を実施した。

2. 作者のレオナルド・ビストルフィについて

この彫刻家は、今日イタリア国外では一般的にはほとんど無名に等しいが、20世紀の初頭における、サヴォイア王家によって統一されたリソルジメント後のイタリアの、最も重要な彫刻家のひとりである。海外展にもたびたび出品を重ね、国際的にも著名な作家であった。実際ビストルフィは、ジョヴァンニ・セガンティーニ(1858-1899)やガエターノ・プレヴィアーティ(1852-1920)、ジュゼ

ッペ・ペリッツァ・ダ・ヴォルペード(1868-1907)ら、イタリア世紀末の象徴主義者たちと完璧に同時代人であった。彼らとはブレラ・アカデミーの美術学生であったところからの友人であり、1800年代のイタリア本来の自然主義的な「ヴェリスモ——真実主義」の傾向に夢想的な理想主義を加えたセガンティーニたちの美学に深く共鳴して作品を作ったことで知られている^[1]。

その作品はかなりの数にのぼる肖像彫刻^[2]を別にすれば、モニュメンタルな様式を具えた墓碑彫刻や公共記念碑、記念像が圧倒的に多い。そこで扱われた主題は当然のことながら、生と死、死の天使、死の接吻、といった象徴主義者たちが好んだモチーフが支配的である。とりわけ1890年代後半より1900年代中頃までは、代表作《死の花嫁たち》、《思い出によって癒された悲しみ》、《セガンティーニ記念碑》(それぞれ本稿作品リスト参照)などに典型的に見られるように、象徴主義的な擬人像や浮き彫りを随所に用いた流麗な装飾的様式を示し、いわゆるイタリアにおけるアール・ヌーヴォー様式(Stile Floreale、Stile Liberty)の代表的作例ともなった。

1910年代以降は次第に「ミケランジェロ風」^[3]の力強い作風、あるいは古典主義的傾向を示すようになる。《ヴィットリオ・エマヌエーレ2世のための記念碑》(1909-11)、《ジョズエ・カルドゥッチのための祭壇》(1910)、《ジュゼッペ・ガリバルディのための記念騎馬像》(1912-28)などがそうした作風の代表例であろう。以後、第1次大戦の戦没者記念碑などの公共記念物を多く手掛けながら、1920、30年代を通じて、イタリアを代表する国際的な名声に包まれた彫刻家のひとりとして活動した。

3. 旧松方コレクションにおけるビストルフィの作品について

これらの作品について、今までにその存在について触れた文献は僅かである。現在までに入手できたものとして以下の資料がある。

① コリエーレ・デッラ・セーラ紙(ミラノ、1923年9月15日)の記事^[4]

「1918年の春に(松方は)急速イタリアにやってきた。ブラングインはセガンティーニ、ミケッティ^[5]、ビストルフィの作品をそこで探すようにと彼に助言したのである。ミケッティについては何処でも何も手に入らずじまいだったが、トリノで松方は少なからぬレオナルド・ビストルフィの作品を購入することが出来、他の作品も発注した。(中略)イタリアで松方が購入した作品は梱包されたままジェノヴァの領事のもとに置かれ、戦争が終わるとすぐに東京に送りだされた」

② 大阪朝日新聞神戸版(1932年-昭和7年-6月8日)の記事^[6]

「神戸の某氏が好況時代に美術館を建設、そこへ陳列すべくイタリーから帰った同国の代表的彫刻家ビストルフィー氏の作品20点が、およそ10年間神戸税関川崎倉庫でほこりまみれになっていた、これは同氏が輸入した時一時に不況に襲われ税金も支払われないことになったためそのままになっていたので、神戸税関ではしばしば競売せんとしたが珍しい芸術品であり、同氏の希望もあったのであらゆる便宜を計り期限を延長、その間、同氏は一纏めに買ってくれる人があれば売ってもよいというので篠崎前税関長などは各方面に

斡旋をしていたが、何分小さなブロンズの他に高さ二間もある大きな大理石像が数点あり、大庭園か公園かでないと置けないようなものなので、多くあった希望者も二の足を踏む状態だったが、今では某氏も一万余円で良いといい、税関の税金と倉敷料一万数千円を合すると二万数千円で手に入ることになるので税関としても非公式に数カ月米希望者を物色していたが思わしく話も運ばないので、最早やむを得ぬというので八日収容貨物として競売することになっていた矢先、突然神戸の某氏が引き取りたいという希望をもち出したので競売を取り消して引き渡すことに決しこれで暗い倉庫の中に十年間埋まっていた世界的名彫刻もようやく明るみへ出ることになった訳である」(筆者により新仮名遣いに改変)

③『松方コレクション西洋美術総目録』(神戸市立博物館編、1990年)

の記載

p.454にS-1として僅かに彫刻一点が「《記念碑》レオナルド・ビストルフィ作」として記載。これは今回の調査作品“c”.《アンヘロ・ヒオレロのための墓碑》に該当するが、掲載されている図版はウルグアイにあるオリジナル作品と思われる。

限られたものではあるが、以上の資料からイタリアから将来されたビストルフィの作品群の数奇な運命が垣間見える。コリエーレ・デッラ・セーラ紙の記事で興味を引かれるのは、松方の助言者であったフランク・ブラングインが松方にイタリア象徴主義の作品の収集を勧めたというくだりであろう。あるいはアンヌ・パンジョー氏が言うように、1900年の万国博覧会前後よりフランスに知られはじめていたビストルフィを、ロダン美術館の初代館長を務め、松方の近代美術の作品購入に直接関与していたリュクサンブール美術館長レオンス・ベネディットが知らぬはずもなく、彼からの強い勧めがあったことも十分想定できる。1911年にイタリアでビストルフィの作品に接したロダンも、この彫刻家の資質を高く評価していたのである^[7]。

一方、コリエーレ・デッラ・セーラ紙中で東京に向かったとされる作品は、おそらく一部が神戸に降ろされたのであろうか。詳細は不明であるが、少なくともビストルフィの作品は1919年以降おそらく1922年頃には神戸の倉庫に入っていたことが、同紙の「戦争が終わると直ぐに東京に向かって送られた」というコメントと、朝日新聞の「暗い倉庫の中に十年間眠っていた」というくだりから推測される^[8]。

4. ビストルフィ作品の現状について

ここで、発見された彫刻17点の現状とその概略に触れたい。広大なX氏邸の広い庭の二箇所に分かれて放置されたままになっている彫刻群は、その位置関係から暫定的にⅠ群、Ⅱ群に分けられる。Ⅰ群に属する彫刻と浮き彫りは、ほとんど脈絡無く放置されたままであるが、Ⅱ群の彫刻はとりあえずは「設置」された状況にある。以下、彫刻・浮き彫り断片のそれぞれの現状と、それらが再構成された場合の主題等について表にする。寸法は概寸で、西洋美術館

の調査データが³重量概算のためのものであるため、K学芸員が³1998年10月に採寸したデータも参照した。

【Ⅰ群】

1	レリーフ(接吻を交わす男女)	ブロンズ 左側に縦に銘文:LE SPOSE DELLA MORTE	271×100cm
2	人物彫刻(裸婦像)	大理石 右側面下に署名: Bistolfi	257×157×115cm (人体部 像高200cm)
3	レリーフ三面付き台座 (正面:羊の群れ) (右側面:牛を牽く農民たちと集落) (左側面:死せる男と死を悼む女たち)	大理石	90×154×156cm
4	群像彫刻(棺を担ぐ人々)	大理石	55×41×61cm
5	人物彫刻(横たわる恋人たち)	大理石	62×65×100cm
6	人物彫刻(マントを被り俯く女性像)	大理石	200×78×73cm (人体部 像高180cm)
7	群像浮き彫り(左翼)	大理石	245×141×60cm
8	群像浮き彫り(中央部)	大理石	245×184×57cm
9	群像浮き彫り(右翼)	大理石	245×184×57cm
10	装飾紋付き台座断片(花紋)	大理石	35.5×117.5×64cm
11	装飾紋付き台座断片(花紋)	大理石	32×151×67cm



Ⅰ群

【Ⅱ群】

12	寓意的人物像(前方に立つ人物)	鉛を多く含んだ ブロンズ(?) 下部にビストルフィのモノグラムあり	像高195cm
13	寓意的人物像(後方に立つ人物)	鉛を多く含んだ ブロンズ(?) 下部にビストルフィのモノグラムあり	像高170cm
14,15	花紋付き台座 二点が組合わさってno.12の人物像の ための台座となる	砂岩(?)	(各)20×125×178cm
16,17	花紋付き台座 二点が組合わさってno.13の人物像の ための台座となる	砂岩(?)	(各)20×125×178cm

これら17点の彫刻・浮き彫りは、再構成された場合、次のようにa-f の記号で表されたビストルフィの作品6点と関連付けられる^[9]。

a:1
死の花嫁たち
Le Spose della Morte
1894-97年
大理石
ヴキエリ墓地礼拝堂 Capella Sepolcrale
Vochieri(北イタリア Frascarolo Lomellina
所在)のための大理石浮き彫り。



a-1

b:2,3
セガンティーニ記念碑
Monumento a Giovanni Segantini, St-
Moritz
1899-1906年
大理石
画家ジョヴァンニ・セガンティーニ(1858
-1899)の死の直後から構想された作品。
カララ産大理石に彫られている。本来マ
ロヤのセガンティーニの墓のためのモニュメ
ントとなるはずであった。結局1907年に、ス
イスのサン=モリッツに創設されたセガンティ
ーニ美術館の庭に置かれたが、以来、ピス
トルフィの代表作と見做されている。女性像
は《物質から解放たれた「美」：アルプス》
La Bellezza liberata della Materia;
L'Alpeと名付けられ、《山岳の「美」》La
Bellezza della Montagna、《理想の「美」、

真実》La Bellezza dell'Idea, la Verità,
《芸術》L'Arteなどとも呼ばれる。台座部分
の浮き彫りは左側面が《自然》La Natura
(セガンティーニの同名の油彩に基づく)、中
央正面が《羊の行進》Processione di
Pecore(ジウゼッペ・ペリッツァ・ダ・ヴォル
ペードの油彩《生の鏡》の構図の改変)、
右側面が《画家の遺骸と芸術の女神》La
Salma del Pittore con la Dea Arteある
いは《愛》Dell'Amore(セガンティーニの油
彩《生の泉の傍らの愛の女神》、《愛の女
神》などの主題・構図を改変)と呼ばれる。
小サイズの習作がカザレー・モンフェラート
市立美術館、ミラノ市立近代美術館他に所
蔵され、ほぼ同寸法の大大理石によるレプリ
カがローマ国立近代美術館にある(1915年
に作者より寄贈)。

サン=モリッツ(スイス)、セガンティーニ美術館



b-2



b-3

c:4
《アンヘロ・ヒオレロの墓碑》
Monumento Sepolcrale per Angelo
Giorello
1907-13年
大理石
《英雄の葬儀》Il Funerale dell'Eroeある
いは《労働の英雄の葬儀》Il Funerale
dell'Eroe del Lavoroとも呼ばれる。
モンテヴィデオ(ウルグアイ)、公営墓地



c-4



d-5

d:5
恋人たち
Gli Amanti
1883-84年
芝居にモチーフをとった甘美な作風の作品。
石膏モデルのみ現存(カザール・モンフェラ
ート市立美術館)。



e-6

e:6, 7, 8, 9, 10, 11
ドゥリオ家のための墓碑:思い出によって
癒された悲しみ
Monumento Sepolcrale per la Famiglia
Durio, Il Dolore Confortato dalle
Memorie
1898年頃-1901年
大理石
1896年に逝去したジウゼッペ・ドゥリオのた
めの墓碑。巨大な浮き彫りで表現された
「思い出」に対して、手前には婦人像に擬人
化された「悲しみ」が立つ。ピストルフィの代
表作のひとつ。
トリノ(トリノ近郊旧 Madonna di Campagna)、
公営墓地



e-7, 8, 9



e: ドゥリオ家のための墓碑:思い出によって癒された悲しみ トリノ、公営墓地



f-12, 13, 14, 15, 16, 17

f:12, 13, 14, 15, 16, 17
アベグの墓碑
Monumento Funerario Abegg
1912-13年
大理石
《生と死》La Vita e la Morte, 《光に向か
って》Verso la Luce, 《死の魅惑の虜とな
る生》La Vita trascinata dal Fascino
della Morte と呼ばれる。白大理石製台
座の上に二体のやはり白大理石に彫られた
寓意的人物像が立つ。
チューリヒ、公営墓地

5. 将来の展望

作品に関する調査は文字通り始まったばかりである。作品のおおよその同定は今回文献、写真資料に基づいて行うことができたが、もっとも基本的な問題として、これらの作品を松方幸次郎が購入するに至った経緯の詳細は未だ不明といてよく、さらなる資料の出現が待たれる。また、これらの作品のほとんどは、すでに1918年の松方のイタリア旅行当時にはビストルフィの代表作として有名であったと考えられることから、松方が彫刻家に依頼して新たに制作されたレプリカないしはヴァリエーションであると推測されるが、その事を裏付けるためには、日本所在の作品と北イタリアを中心に各地に点在するオリジナルの完成作や石膏原型（ほとんどがカザーレ・モンフェラート市立美術館に所蔵される）とを丹念に比較の上、資料の探索が必要である。

さらに作品保存の観点からすれば、こうした体積、重量ともに甚大な作品の管理は、到底個人所蔵家の手の及ぶところではない。事実、所蔵家の方の尽力にもかかわらず、現在に至るまで彫刻群はほとんど雨ざらしのままいつでもよく（ビニールの覆いが掛けられているにせよ）、ことに大理石はすでに劣化が始まっている。

ほとんど四分の三世紀を経て奇跡的にも忘却の彼方から再び姿を表したビストルフィの彫刻群は、質、量ともに松方コレクションの失われた部分のイメージを大きく膨らませる力を持っている。またそれらはイタリア近代美術史を飾る代表的作例であり、日欧の文化交流史、ひいては日本の近代史の貴重な証人でもある。これらの作品が安住の地を得、さらには適切な形で公開されるように、早急に何らかの策が講じられる必要があろう。

[1] セガンティーニ、プレヴィアーティ、ビストルフィはしばしば、ヴェネツィアのピエンナーレ、トリノのトリエンナーレを始め、内外の展覧会に出品したが、1906年にはミラノで共同して三人展を開いている。Mostra de Segantini, Previati, Bistolfi, Galleria Grubicy, Milano, 1906

[2] 明治期にお雇い外国人として来日していたアントニオ・フォンタネージの肖像なども制作している（1883年）。

[3] いわゆる「ビストルフィスモ」と呼ばれることもある。1902年のロダンとの出会いもその作風の変化に関係があるとも考えられる。Sandra Berresford, 《Bistolfi et il “Bistolfismo”》, in *Catlogo della mostra, Bistolfi : 1859-1933 ; il percorso di uno scultore simbolista*, Casale Monferrato, Chiostro di S.Croce, Palazzo Langosco, 1984 参照。

[4] イタリア語原文を以下に記す。“Nella primavera del '18 venne espressamente in Italia, dove il Brangwyn lo aveva consigliato di cercare opere del Segantini, del Michetti e del Bistolfi. Del Michetti non fu possibile aver nulla, ma a Torino il Matsukata pote acquistare parecchie cose di Leonardo Bistolfi ed altre ordinarie.....Gli acquisti fatti dal Matsukata in Italia rimasero a lungo impaccati a Genova presso quel Consolato e di la furono poi spediti a Tokio appena finita la guerra” (《Notizie d'Arte: Opere di Bistolfi e di Segantini distrutte dal terremoto al Giappone》, in *Corriere della Sera*, Milano, 15 settembre 1923. Annie-Paule Quinsac, *Segantini; Catalogo generale*, Milano, 1982, vol.II, p.558に引用)

[5] Francesco Paolo Michetti (1851-1929) ナポリ生まれの風景画家。印象派風の筆致で主にアブルッツィ地方の風景を描いた。

[6] 以下はこの記事の見出しである。「やつと世に出た世界的名彫刻/税金が払えず十年を倉庫に/イタリアで買ったもの/競売を免れ某氏へ」

[7] Anne Pinget, *Bistolfi, au loin de son pays*, 未公開論文。

[8] 1927年の金融恐慌を待たずして、すでに1922年には川崎造船は苦境に陥っていた。越智裕二郎「松方コレクションについて」、展覧会カタログ『松方コレクション展』神戸市立博物館、1989年、pp.114-115参照。

[9] 《Repertorio Opere Scultoree》, in *Catalogo della mostra, op.cit.* pp.215-302所載の資料を参照した。

本報告書を書くにあたり、作品同定に関してご助力いただいた、オルセー美術館彫刻部門主任研究官アンヌ・バンジョー氏、ギュスターヴ・モロー美術館館長ジュスヴィエーヴ・ラカンブル氏、カザーレ・モンフェラート市立美術館担当官ジェルメーナ・マッツァ氏に御礼申し上げます。